

## 2005年度バレーボールミーティング報告

### 「アダプテッドスポーツとしてのバレーボール」

#### 1. はじめに

大阪府高槻市において2005年度第1回バレーボールミーティングが開催されました。大阪での研究会集・ミーティングの開催は3回目となりますが、いずれも多様な視点からバレーボールを見るという内容であり、今回もさまざまな環境でバレーボールを楽しんでいる方々の姿を紹介することになりました。

バレーボール学会では、小学生から中高齢者までさまざまな年齢層の人達の、多様なバレーボール活動に焦点を当てて研究や実践活動を行っています。今回は、テーマを「アダプテッドスポーツ」とすることにより、さまざまな障害ある方々がどのようにバレーボールと取り組んでいるのか、あるいは一層の普及発展には何が課題なのか、などを理解することを目的として開催されました。

現在、私たちが目にするバレーボールは、国際大会やVリーグなどに代表される勝負を競うバレーボールに独占されている感は否めません。しかしバレーボールは誰のもの？ スポーツは誰のもの？ という問い掛けを考えた場合、バレーボールはみんなのものであり、誰もがバレーボールを楽しむ権利を有していると改めて考えさせられる充実した内容でした。本学会員がこれらの課題を自分のものとして捉え、理解していただけることを望んでいます。

(文責：編集委員 河合学)

#### 2. プログラム

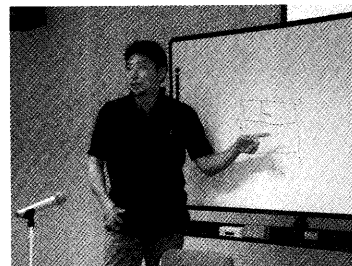
- 1) 開催期日：2005年7月18日（祝・月）
  - 2) 会場：高槻市立「総合市民交流センター」
  - 3) 日程：開会の挨拶：朽堀申二（バレーボール学会会長）
    - ①シッティングバレーボールの紹介  
佐藤貴美（大阪アタッカーズ・キャプテン）
    - ②「音のない世界からの挑戦」（デフリンピックのバレーボール）  
都倉里江（兵庫県立姫路聾学校）  
山田 茂（大阪市立光陽養護学校）
    - ③フロアバレーボールの紹介  
垣野泰彦（大阪府視覚障害者福祉協会スポーツ総括）
    - ④精神障害者のバレーボールの紹介  
柏森康雄（大阪体育大学）
- 質疑応答

#### 3. レクチャーの概要

##### ①シッティングバレーボールの紹介

佐藤貴美 氏

シッティングバレーボールは、床に臀部の一部が常に接触したまま行うバレーボールといえればわかりやすいでしょう。サーブ、ブロック、アタックなどで、立ち上がったたり、飛び跳ねたりした場合は反則になります。国内ルールという設定で、レシーブの時に素早く床から離れることは認められていますが、その「程度」は審判員の判断に任せられます。ネットの高さは、男性1.15m、女性1.05mで、混合の場合は男性の高さになります。コートのはがさは図1をご覧ください。シッティングバレーボールのルールは、基本的には国際バレーボール競技規則に基づきますが、国内では以下の特別ルールが定められています。



■国内ルール（抜粋） ※ここでの「臀部」とは、肩から臀部までの上体のことを指します。

1. 競技者の位置

競技者の位置は、その臀部の位置によって決定され統御される。（手足はアタックゾーンやコート外のフリーゾーンにあってもよいことを意味する）

2. スパイク

競技者は、アタックヒット（スパイク）をする場合に、臀部をコートから浮かせてはならない。（「リフティング」という反則名）

3. ブロック

前衛は、相手チームのサービスをブロックすることが許される。ブロックを行う時、競技者はコートから臀部を持ち上げることはできない。

4. レシーブ

レシーブの時、短時間であれば臀部の離床は許される。（立ち上がりや歩くことは禁止されている）

5. コートの大きさ

ネットを挟んだ片面が、サイドライン5m（ネットから2mにアタックライン）、エンドライン6mの横に広い長方形コートで、エンドラインがサービスゾーンとなっている。

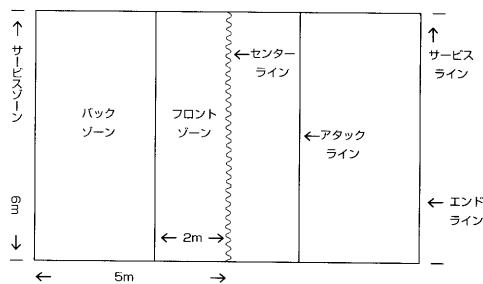


図1 シットイングバレーボールのコート

シットイングバレーボールの歴史は、1944年に戦争負傷者のリハビリのためにヨーロッパの病院で「シットボール」として始まり、1956年にオランダでバレーボール形式の「シットイングバレーボール」として確立されました。ヨーロッパでは1957年に大きな大会が開催され、その際に統一ルールが制定され、その後は数ある障害者スポーツの一つとして成長してきました。また1980年にはパラリンピック種目にも採用され、一段と世界中に広まってきました。しかし日本での歴史はまだ浅く、チーム数も少ないのですが、現在は少しずつ広まりつつある状況です。シットイングバレーボールは障害者だけのスポーツではなく、健常者と一緒にプレーすることができるため、ユニバーサルスポーツとか、バリアフリースポーツに属します。

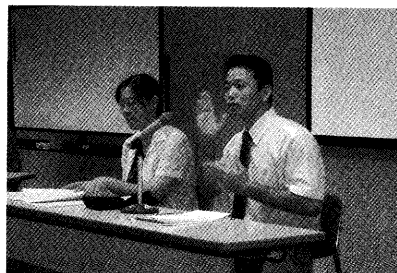
実際のゲームのビデオを見て、皆さんが思っている以上に本格的なサーブ、アタック、そしてそれに対するレシーブを行うのがおわかりいただけだと思います。臀部を床に打ちつけることがあるため、選手は自転車用、あるいはスノーボード用のパッド入りパンツを着用しています。そのパッドには厚さ制限があり、約1cmほどだと思えます。ルールの補足としましては、ボールは5号球を使用し、ローテーションがあること、場合によってはリベロ制を導入することもあります。その他はほとんど6人制ルールと変わりません。まさに6人制バレーボールを座ってプレーする感覚です。

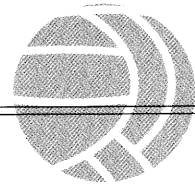
シットイングバレーボールの問題点ですが、まだ国内では認知度が低いということ、障害者の中でも下肢障害に制限されること、専用のボールを有している体育館が少ないために練習・試合が開催できる場が限られるなどが挙げられます。しかしシットイングバレーボールは障害者や、膝・足首などに怪我をした健常者のバレーボール選手達によって今も成長しています。シットイングバレーボールは、スポーツの中で障害者と健常者が高い技術を持ち得ながら、共に運動できるスポーツ競技としてさらに成長する可能性を持っているのです。

② 「音のない世界からの挑戦」

（デフリンピックのバレーボール）

都倉里江 氏  
山田 茂 氏





〈山田氏〉 ※手話を交えての講演でした。

7年ほど前に講師としてろう学校に勤務していましたが、その時にバレーボールに関係した経験がありますので、その体験談を話させていただきます。

初めて聴覚障害者のバレーボール（女子）を見た時は、ルールは全て通常の6人制と同じですし、プレーも健常者と同じように行うことができるので、本当にこの人たちが障害者なのか疑問に思うほどでした。しかし、一緒にバレーボールをしていくうちに分かってきたことは、個人としては上手なプレーができるけれど、コミュニケーションが不足しているために単純なミス、特に選手間にボールを落とすことが多くみられました。そこで指導をする際に注意したことは、まずコミュニケーションをとるために、ボールが止まっている間に手話による打ち合わせをさせましたが、いざラリーが続いたり、とっさの展開に関しては手話だけではなかなか通用しませんでした。ある程度レベルが上がってくるとアイコンタクトで状況を判断できるようになるのですが、その能力は健常者よりも優れていると感じています。一方、指導者が説明しても言葉の理解が難しいという特殊な環境のため、こまめに集合させて簡単な言葉で説明するとか、上手な選手のプレーを何回も見させて視覚に訴えるという方法で指導してきました。また、ろうの選手はすぐに「わかった」と言うのですが（とりあえず「わかった」と言っておけば、その場をしるげる）、本当はほとんどわかっていない場合でもそう言うので、できるだけ本人が納得できるまで理論的に説明するようにしていました。といってもなるべく簡単な言葉で、こうすればこうなるからこうした方がいいんだよということを理解できるまで何回も説明しました。私自身がプレーしていた時には何気なくやっていたことも、理屈をつけてみると納得できるような繋がりになっていることを理解できたのは、ろう者のバレーボールを指導したおかげだと思います。

現在は学校以外に大阪市の社会人女子チームを指導していますが、週に2回、3時間ほどの練習をしています。20～30歳代の選手が中心で、ほとんどの人が仕事を持っています。ろう者の中には身体が元気ならばバレーボールをしようという雰囲気があるため、バレーボールが生活の一部となり、本当に心からバレーボールを楽しんでいるところが素晴らしいと思います。ただ、子どもの数が減っていることから学校単位ではチームを組むことが難しくなっているため、中学と高校で合同チームを組むなどの工夫をして大会運営をしています。

〈都倉氏〉

デフ（deaf）とは「ろう、耳が聴こえない」という英語であり、聴覚障害者のオリンピックのことをデフリンピックと称しています。障害者のオリンピックとしては4年に1度開催されるパラリンピックが知られていますが、聴覚障害者はパラリンピックへの参加が認められていません。他の障害に比べて身体能力が高いというのがその理由ですが、一方でバレーボールのような集団競技においては声による意思の疎通が重要となるため、チームを組み立てること、レベルの高い大会へ出場することは非常に難しいのが現状です。世界ろう者競技大会の歴史は古く、戦前から4年ごとに開催されてきましたが、2001年のイタリア大会からIOCの承認を受け、デフリンピックとして確立しました。

私は日本代表女子チームの監督として本年1月にオーストラリア・メルボルンで開催されたデフリンピックで準優勝、銀メダルを獲得することができました。

※ここで、日本代表女子チームの特集番組を上映

日本代表選手を選考するにあたっては、日本全国の大会を見て歩いて良い選手がいるチームの監督にお話したり、良い選手がいると推薦してこられる指導者に会ったり、さまざまな情報網を使って選手確保をしてきました。なかには普段は健常者と一緒にプレーしている大学生の選手もいますが、その子は常には補聴器を使ったり読唇術で会話しているため、ろう者のバレーボールは知らないし手話も理解できず、最初はずいぶん戸惑ったようです。ろう者はすべて手話ができるとは限りません。お互いの意思の疎通には時間がかかりましたし、苦労も多かったのですが、選手も私もその苦労を乗り越えながら努力してきました。

現在、日本代表を取り巻く環境は厳しいものがあります。国内においてはろう者バレーボールへの関心は薄く、選手を集めることさえ難しい状況が続いています。しかもデフリンピックはパラリンピックに比べて知名度が低く、寄付金・援助金等の資金面においてもわずかしかなりません。オリジナ

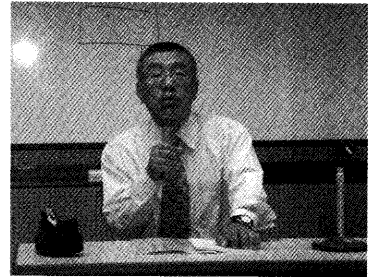
ルのTシャツを販売して資金集めをしたこともありましたが、合宿や遠征にかかるお金は自己負担が大きく、合宿に参加できない選手もいました。世界の強豪チームとの戦いだけでなく、多くのハードルを越えながらの戦いの日々が続いています。選手たちの頑張っている姿を、一人でも多くの方に知ってもらいたい、心からそう願っています。

※次回のデフリンピックは、2009年に台北で開催されます。

### ③フロアバレーボールの紹介

垣野泰彦 氏

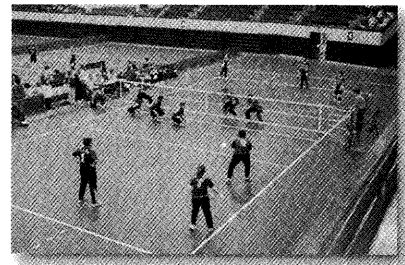
フロアバレーボールは、ネットの下にボールを通過させて相手コートに打ち返すバレーボール競技です。1960年代には視覚障害者のスポーツとして「盲人バレーボール」と呼ばれて盛んに行われるようになったため、1970年代に全国統ルールを作成しようとする試みがなされましたが、なかなか広まりませんでした。そこで1991年に統ルールを作成する目的で第1回盲人バレーボール選手権大会が座間市で開催され、その結果を元に改訂されたルールが1994年に現在の規則の基礎として独立しました。その後、全国レベルの大会が開催されるに至り、1995年に「フロアバレーボール」と改名し、障害の有無に関わらず誰でもできるニュースポーツとして全国に広まりました。ボールに鈴が入っていると思っ



ている人が多いと思いますが、現在は普通の5号球を使用しています。視覚障害者はどうしても家の中に閉じこもりがちになるのですが、なるべく外に出て社会に触れる、あるいは他の方々と接触する機会を増やすことが必要であり、その意味でもフロアバレーボールが盛んになることはよいことだと思います。

ルールは少々わかりにくいと思いますので説明します。

フロアバレーボールは、6人制バレーボールのルールを基礎に、弱視者・全盲者が共に楽しめるように、工夫されています。一般のバレーボールとの大きな違いは、フロアバレーボールではネットの下を30cm開け、ネットの下でボールを打ち合います。基本的にボールは床の上を転がすことになります。前衛競技者は、すべてアイマスク（ゴーグル）を着用し、後衛競技者は弱視の選手が入ります。前衛競技者はボールが床にはねたり転がったりする音と、後衛競技者の指示に従って動くことになります。前衛競技者のレシーブは、ボールを体全体で受けることができます。ただし、ボールを受けた後はボールを動かしてはいけません。アタックは、片手でボールを押さえて反対の手でボールを打ちます。後衛競技者は、普通のバレーボールのレシーブや、アタックのしかたと同じだと思ってください。ただし故意にボールを足で蹴ってはいけません。後衛競技者は、前衛の後ろにあるアタックラインより前に踏み込んでボールを打ってはいけません。サーブを打つ前に、サーバーは自分のポジションナンバーを言ってからサーブします。サーブされたボールが相手コートに入るまでは、どちらのチームも声を出すことを禁止されています。フロアバレーボールのローテーションは、前衛・後衛それぞれ3人でローテーションします。コートは普通のバレーボールと同じ広さです。



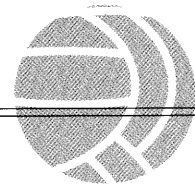
### ■ルール（抜粋）

#### 1.コート及び競技者の位置

センターラインからアタックラインまでのフロントゾーンに前衛競技者が3人並んでしゃがんだ姿勢で位置する。アタックラインからエンドラインまでのバックゾーンに後衛競技者が3人位置する。サービスゾーンは、エンドラインの右隅から3mの後方に位置する。

#### 2.前衛競技者

アイマスクを着用してネット際で主にしゃがんだ姿勢でプレーする。サービスやスパイクなどは、一方の手でボールを押さえて他方の手の握り拳で打つ。また相手コートから来るボールをブロック



し、トスやパスをする。

### 3.後衛競技者

保有視力を利用して、立った状態でプレーする。ボールは押さえずに直接握り拳で打ち出す。

### 4.ゲームの進め方

サービスは、サービスゾーン内の床上に置いたボールを、主審の吹笛後、自分のサービス番号（＝ポジション番号1～6で背番号ではない）を告げて打つ。サービス後は、ブロックを除き3回以内で相手コートにボールを打ち返す。

### 5.主な反則

ネット前コール：サービスされたボールが、センターラインを超える前に声を出した場合

ストップボール：ボールがコート上で停止した場合

ボールアウト（空過）：ボールが転がらず空中に浮き上がり、バックゾーンに触れなかった場合

キャッチボール又はホールディング：手を開いてボールを打った場合

オーバーゾーン：後衛競技者がフロントゾーンに入ったり、バックゾーン外に両足を出してプレーした場合

### 6.得点と勝敗

1ゲームは、ラリーポイントによる1セット21点の3セット制。第3セットについては15点までだが、試合時間は90分に制限されている。

## ④精神障害者のバレーボールの紹介

柏森康雄 氏

第8回研究大会のコミュニケーションアゴラにおいて、田所淳子氏（高知県立精神保健センター）が「精神障害者バレーボール競技の今後の普及と方向性について」を話題提起されたことが、精神障害者のバレーボールを知るきっかけになりました。その後、精神障害者のバレーボールがどのように発展しているのかを調べていたところ、来年国体が開催される兵庫県のバレーボール関係者の方に「コートに輝く笑顔と汗―精神障害者たちのスポーツ大会―」のビデオを紹介されました。今日は精神障害者のバレーボールの発展の姿を見て頂き、理解を深めてほしいと思います。

精神障害者のバレーボールは2001年に初めて全国大会（仙台市）が開催されました。6人制ルールを基本として、ボールやネットに配慮を加えたオリジナルルールの元で、大会は成功すると共に、広報や地域での取り組みを通して、精神障害者スポーツの普及、社会参加に大きな波及効果をもたらしました。翌年の第2回大会は全国障害者スポーツ大会（高知県）のオープン競技として13都県15チームが参加され成功裏に終わっています。現在では全国を8ブロックに分けたバレーボール大会を事業化し、ブロック大会の代表チームが全国大会に参加するなど徐々に普及している状況です。

ルールの中で特徴的な点は、ネットの高さは2m15cm、ソフトバレーボールを使用すること、サービスされた後はフリーポジション制、さらにチームの中に必ず女性が1名以上参加すること（女性選手が参加不可能になったら、その時点でゲーム終了、不戦敗となる）が挙げられます。コートに輝く笑顔と汗は健常者となんら変わることなく、またバレーボールに取り組むことによって日常生活も積極的になるなどの二次効果も挙げられています。特に、バレーボールの特性である相手選手と直接的に接触しない（プレーを妨害されない）ため、味方同士が3回のプレーでボールを繋げて相手コートに返球することが、助け合いや補い合い等の協調性や社会性を育てるとともに、人間関係づくりに大いに役立っていると思われます。田所氏も研究大会で述べられていたように、バレーボールは相互協力に大変よい影響を与えることができる最適のスポーツであり、精神に障害を持つ人がバレーボールから「楽しみ」や「協力すること・助け合うこと」を身体で学び、「自己実現」を果たしていく姿をビデオで再認識することができ、たいへん有意義でした。

